

# 高齢者のモビリティ環境に関する考察—歩行補助車「シルバーカート」使用に関して—

大阪芸術大学大学院芸術研究科 堤中知子

## 1. はじめに

21世紀に入り高齢者の増加は確実なものになっている。高齢者を対象とした研究はさまざまな分野で行われており、高齢者が移動の際に使用するものとして電動カートに関する研究は行われている。しかし、高齢者がよく使用している歩行補助車「シルバーカート」(シルバーカー)に着目した研究は非常に少ない。そこで、本研究では高齢者の移動(モビリティ)の側面からシルバーカートに着目し、その使用状況を明らかにするとともに今後の高齢者のモビリティ環境について提案することを目的とした。

## 2. 歩行補助具の歴史的背景

歩行補助具というのは、歩行を支えるものであり、杖、歩行器、歩行車、ショッピングカート(図1)、シルバーカート(図2)など様々な種類がある。現在、形態に関する明確な区分は無く、これらの歩行補助具は使用者のニーズに合わせて、構造、仕様、デザイン共に流動的になっている。

本論文ではショッピングカートについては買物かご付きカートとし、座面がなく、使用者が後ろから引っ張って使用するものと定義した。また、シルバーカートについては、荷物が入れられて、座って休憩することができるという座面構造を持ち、使用者が前へ押して使用するものと定義した。シルバーカートは一般的に歩行補助車、手押し車、老人車、買物かご型歩行車、買い物用歩行補助具、お達者カー、シルバーステッキ、キャリーバッグ、ショッピングバック等と呼ばれており、現在統一呼称は無い。このような中、使用者が最も多く使用している呼称は「手押し車」である。一方業界ではシルバーカーという名称が増加しており、この名称の使用が確立されつつある。以下、本論文では、シルバーカートの表記で統一する。

シルバーカートは、大阪で誕生した日本独自の歩行補助具である。昭和45年に大阪の堺市に本社を構える乳母車メーカー、(株)幸和製作所が国内ではじめて「老人車」(商標 シルバーステッキ)として商品化し製造販売を開始したのがシルバーカート誕生のきっかけであった。それ以前は赤ちゃんが使わなくなった大きな箱型乳母車や簡易ベビーカーがお年寄りの杖代わりとして荷物を運ぶためなどに使用されていた。要するに、使わなくなった乳母車などに板などを載せてワゴン形態にし、買物時や農作業時の荷物の運搬などに利用

されていたのである。この様にシルバーカートはベビーカーをその起源に持ち、堺市という自転車産業が盛んであった地域で誕生した大変珍しい商品である。ショッピングカートが日用雑貨業界の商品であるのに対し、シルバーカートがベビーカーメーカーによる子供乗物・玩具業界の商品とされているのはこれに由来する。このような経緯のため、現在でもシルバーカートメーカーは大阪地区を中心とした地域に集中している。



図1 ショッピングカート 図2 シルバーカート

## 3. シルバーカートの使用状況に関する調査

### (1) 調査概要

主として歩行補助具を使用している高齢者を対象としてヒアリング調査を実施した。

シルバーカート使用者に対しては計2回のヒアリング調査を行った。第1回目調査は1999年7月から9月までの2ヶ月間、大阪市淀川区内の木川地区コミュニティ道路周辺で歩行補助具使用者に対して行った調査であり、第2回調査は2001年9月から10月までの2ヶ月間、大阪市淀川区内7ヶ所で開催されている社会福祉協議会主催の「ふれあい喫茶」にて高齢者対象に行った調査である。福祉ショップに対しては、同区内にある「福祉・健康ショップ オアシス」にて行った歩行補助具購入など全般に関する現状実態、ニーズ

及び問題点についてのヒアリング調査である。シルバーカートメーカーに対する調査としては、コンビ（株）ウェルネス事業部からの提供資料、大阪育児乗物協同組合主催の第 29 回ベビー&シルバーライフショー（2000 年 2 月開催）で出展メーカーに行ったヒアリング調査による。

## (2) 調査結果

高齢者に対してのヒアリング調査（シルバーカート使用者、福祉ショップ、シルバーカートメーカーに対してのヒアリング調査）をまとめた結果から、高齢者のシルバーカート使用に関して以下の指摘が可能である。

### ①シルバーカートの使用者は 80 歳代以上に多い

使用者は足腰が不自由な人が多く見られる。151 名の高齢者に対して行ったヒアリング調査において、歩行補助具使用者に行ったヒアリング調査では、歩行補助具使用者の平均年齢は約 81 歳であり、非使用者の平均 73 歳と比較して大きな開きがある。また、シルバーカート使用者のみでは、平均 85 歳となっている。

### ②使用目的は買物が主であり、杖と併用利用する人もいる

使用の最大目的は買物である。しかし、杖代わりとして、どこに行くにもシルバーカートを使用するという人もいる。調査対象者の中には、シルバーカートと杖の併用が見られたが、これは買物時スーパー等に入る場合、シルバーカートで内部を持ち込めない店舗があるからであり、使用者は自分の判断でシルバーカートと杖の使い分けを行っている。

### ③使用理由は、身体的理由と心理的理由である

使用理由は足腰が弱ってきたためという身体的理由と、持つ事によって安心感になるという心理的理由に大別される。シルバーカートを使用している多くの人は足腰に何らかの問題を抱えている人が多い。しかし、シルバーカートを持つようになってから、行動範囲が広がったという人がいた。更に、シルバーカートを利用することは、便利であるという考えや、友人が持ち始めたからという要素もあった。

### ④前期高齢者と後期高齢者とはモビリティ環境が異なる - 遠出型から近距離型へ -

高齢者に対してのヒアリング調査、行動観察などから明らかになったことであるが、高齢者には高齢者独自の移動特性がある。これを高齢者のモビリティ環境と定義すると、前期高齢者と後期高齢者の間では、モビリティ環境としての移動目的地、移手段、移動距離が異なる。前期高齢者で元気な人は自転車を利用する人もいる。そのため、遠出型の人も多い。しかし、後期高齢者になると自転車の利用は少なくなり、替わって交通手段は徒歩となり、ショッピングカートの利用が見られるようになる。そして、80 歳代に入るとシルバーカートの利用が多くなるのである。

### ⑤ショッピングカートからの買い替え使用が多い

ショッピングカートの使用者平均年齢は 70 歳代であるが、ショッピングカートでは身体が支えきれない、休憩できないなどの理由から 80 歳代に入ったのを機に買い替える者が多い。特に家族から、「そろそろシルバーカートを持ってはどうか」と提案される事が多く、また実際に 80 歳代では、ショッピングカートからシルバーカートへの買い替えが多数見られる。しかし、非使用者からは、もう少し年をとるまで買い替えは控えたいという意見があった。

### ⑥日本の気候風土がシルバーカートの使用を促進している

シルバーカート使用者は、前述のように身体的理由や心理的理由を有している事が多い。そのような中、日本の多雨という気候風土の中で、降雨時に傘をフレームにセットして使用することにより、両手が自由となるため、雨天外出時の外出増加や安定感増加に役立っている。また、木陰などが少ない中、日差しを避けるために日傘をさしている人もいる。

### ⑦座面を使って、休憩したいという希望は持っている

シルバーカート使用者は、足腰が弱ってきたなどという身体的理由を持つ人が少なくない。そのような中、座面を用いて休憩したいという希望を持つ人が多くいることがわかった。しかし、休憩する場所に間

題があるというのが現状である。ヒアリング調査からわかった事は、「いつでもどこでも」自分が休憩したいと思ったときにちょっと休憩したいというニーズが多いということである。歩道上など、どこでも座れるということではなく、うまく止まれる場所がないというのが現状である。外出時に止まって座り、快適に休憩できるという場所の確保が急務である。実際、座面を利用して休憩するという人の中でも、「いつでもどこでも、休憩したいが、その場所が無い。そのため、放置自転車の脇であるとか、街路樹の横、そして、電柱の横など、ちょっとしたくぼ地を利用している。」という意見が多かった。

⑧男性使用者には、女性が持つものとしてのイメージが高く、抵抗感が強い

（株）サツキのミスターシリーズなど男性向けの商品も開発されてきているが、シルバーカート自体に目を向けたときにいえることは、「シルバーカートは女性が持っていることが多く、女性的であるから持ちたくない」と考える男性が多いということも忘れてはならない。男性からは、持つことに対して抵抗感が強く、「乗るとしたら電動カートである」という意見も寄せられた。「買いもの型歩行車」という名称もあるように「シルバーカート」と「買物」との結びつきの強さから「買物」と「女性」を連想し結びつけることにより、男性がシルバーカートを敬遠するという、ある種男性の見栄的な要因が読み取れる。

表 歩行補助車種類別使用形態

		ショッピングカート	シルバーカート
身体特性	年齢	前期高齢者	後期高齢者
	身体理由	特になし	足腰に不調
	身体補助	特になし	強い
使用特徴	走行形態	後ろから引っ張る	前へ押し出す
	座面	なし	あり
	使用目的	買物補助	買物複合（交流・休憩）
	使用形態	単独使用	複合使用（杖・サスペンション）
行動特性	コミュニケーション	行わず通過する	行い、その場にたまる
	交通機関への持込	あり	なし
	移動距離	短い	長い
	休憩	なし	あり
	空間的利用	なし	あり
	内部空間への持込	なし	あり

(3) 調査考察

シルバーカートの使用者は後期高齢者に多く、足腰が弱ってきた高齢者が外出時、特に、買物の際の「第二の杖」「自分の第三の足」としてシルバーカートを使用しているということが分かった。更に、高齢者はシルバーカートの座面を利用して、「いつでも、どこでも」ちょっと休憩したいという希望を持っているということがわかった。現在、歩行に不安を抱えている人が休憩するためのベンチとして、また、買物の荷物を楽に運ぶための買物かごとして、さらに、歩行の際の補助手段として第2の杖ともいえるシルバーカートを用いるようになり、自らの手で高齢者の「マイ・カー（シルバーカート）」を社会に持ち込んでいるのである。このように、シルバーカートは高齢者、特に75歳以上の後期高齢者にとって、日常生活の上で、「必要不可欠な手段」であり、「必要不可欠な道具」とであるということが言える。

このような状況下、

1. 重い買物荷物などを長時間持つことに困難のある人が荷物を楽に運べるように
2. 休憩する場所を確保するために
3. 健康のための歩行に利用するために
4. 杖代わりの「歩行補助具」として
5. 「こける、こかされるのでは」（ころぶ）と言った歩行能力に対する不安解消のため
6. 相手に自分が高齢者であることを認知させるために

シルバーカートを利用する人が増加してきているのである。このシルバーカートを単に買物という手段のためだけでなく、社会における「私設移動型ベンチ」として位置付ける必要性がある。

さらに、日本では現在、電動カート以上にシルバーカートが受け入れられている。この要因として、

- 1.健康のために歩く人が増加しているということ
- 2.値段が手ごろであるということ（2～3万円台）
- 3.歩道の幅員が十分確保されていない
- 4.電動カートは「道交法」上「歩行者」であるという事など、電動カートに関して周知されていない
- 5.家族の意思決定が影響している
- 6.周囲の人が使用しているので抵抗感がない

等が考えられる。高齢者は上述の理由でシルバーカートなど歩行補助具を利用しているのである。

#### 4. おわりに

本研究では高齢者のモビリティ環境に関して高齢者が多用しているシルバーカートに着目し、ヒアリング調査により高齢者の日常行動特性を明らかにすることを試みた。

多くの高齢者は住み慣れた地域で自立して住み続けたいと願っている。高齢者は生活スタイルの変化や環境の変化にさらされており、多くの高齢者が歩行補助車に私的交通を頼っている現段階では、歩行環境や休憩場所の有無など高齢者独自のモビリティに関する要素、すなわちモビリティ環境が重要となる。

現在、高齢者が外出する際に必要としている休憩するための場所の確保など、彼らが望む「いつでも、どこでも」休憩したいという状況は実現できていない。高齢者の要望は「いつでもどこでも、安全、自由、快適に、ぱっとさっと休憩できる」ということである。これを形にしたものが「シルバーカート」であり、多くの高齢女性は「シルバーカート」という歩行補助車を自らの手で街に持ち込み、生活を維持しているのである。そのためシルバーカートなど歩行補助車が持つ意味合いは、単に杖代わりとして高齢者のモビリティ環境に貢献しているだけではなく、外出を促すという側面から見た場合、高齢者と社会をつなぐ窓口的役割を有し、社会との交流に関して貢献しているのだといえる。

筆者が行ったヒアリング調査は、シルバーカートが数多く利用されている場所を中心に行った。その調査場所とは、坂道のない、平坦な場所であり、住宅が高密度に密集している市街地である。このような場所は、高齢者の日常生活において重要とされる商店や病院などの施設が高密度に立地しており、途中で座面に座り、休憩をしながら、シルバーカートを使用し、自立して生活していくことに適した場所であるということがいえる。本研究では多くの高齢者が「ちょっと休憩できる空間」を求めているということがわかったが、この「ちょっと休憩できる空間」を高齢者のための小空間「シルバースポット」として提案する。高齢者の地域に住み続けたいという願いをかなえ、「自由に外出したい」という希望を実現していくためにも、高齢者がシルバーカートを使用して自由に休憩できる「シルバースポット」を提供し、また、この「ちょっと休憩できる場所」を人々と出会い、交流するための空間として提供することが、高齢者のためのモビリティ環境整備に最も重要であると考えられる。商店や病院、住宅などが密集している都市形態は日本の多くある伝統的市街地の一般的な姿であり、このような既成市街地は広がっている。そのため、シルバーカートを使用し、高齢者が快適に生活していくために適した場所が数多くある。現在、これらの手法を応用できる範囲は非常に多いと考えられ、既成市街地において「シルバースポット」を設置していく必要があると考えられる。

今後の課題として、坂道や近隣に商店や病院のない住宅だけのような場所ではシルバーカートは使いにくいという問題点について考察する必要がある。

#### 参考文献

大阪育児乗物協同組合：育児のりものニュース、第9号

#### 図版出典

株式会社幸和製作所 パンフレット（図1）

コンビ株式会社 パンフレット（図2）